

解説 プルヴェラー絵本コレクションと調査データ

国文学研究資料館 鈴木 淳

一、プルヴェラー絵本コレクションの概要

現在、米国スミソニアン協会フリーア・ギャラリー・オブ・アーツ（以下、フリーア美術館と略称）に所蔵されるプルヴェラー・コレクションは、日本の江戸時代以降、近現代に至る一大絵本コレクションとして、世界的にその名を知られた存在である。本コレクションは、旧蔵者のゲルハルト・プルヴェラー博士が、ローズマリー夫人とともに、一九七〇年代から二十一世紀の初頭にかけて、ドイツのケルン市に在住し、衛生微生物学等を専門とする医学博士として研究業務に勤しむ傍ら、肉筆画、一枚摺りなどとともに蒐集に努めてきた結果、構築されたものである。蒐集に当たっては、主として英国の日本美術研究者として有名なジャック・ヒリアーの助言を受けながら、欧米や日本の古美術商、古書籍商その他の人々との交渉を通じて、蒐集が図られたという。プルヴェラー博士自身、「私たちの浮世絵コレクションは版画、絵本、肉筆画とスケッチの三分野から成っています。私自身は最も絵本が好きですが、これもヒリアー氏の影響を受けたためといえるでしょう」（『秘蔵浮世絵大観 プルヴェラーコレクション』序文）という通り、殊の外、絵本に愛着を持っていた。

二〇〇三、四年頃、プルヴェラー博士は、大学を退任して、故国のオーストリア近くに移住する前後に、一枚摺、摺物などのコレクションを徐々に手放すに至った。しかし、最後に残された絵本については、散逸を避け、まとまった形での受け入れ先を探し求めた結果、二〇〇七年、最終的にフリーア美術館の手に帰したのである。購入に当たっては、コレクションが、海外における日本絵本のもっとも重要なプライベート・コレクションであるとともに、それらが木版の黄金期である江戸及び明治時代に制作されたことで、世界のグラフィックアート史から見ても極めて重要であるという位置付けがなされたと聞いている。また、テーマについて、一枚摺りに比べて、板本のそれが多端であること、画風についても琳派、円山四条派、そして南画系など、商業的な一枚摺りにはまったく手を染めて来なかったが、絵本の挿絵やデザインにおいては活動的であった絵師たちの作品に広く及んでいることに留意している。そのためプルヴェラー・コレクションは、江戸及び明治以降の近現代の視覚的、文学的な芸術であり、また文化的、社会的、経済的な歴史についての調査と展示のための絶大な資源、広大な宝庫であり得ると判断されたのである。

コレクションの一端は、ジャック・ヒリアーの *The Art of the Japanese Book* (Sotheby's Publications, 1987)、檜崎宗重監修『秘蔵浮世絵大観 プルヴェラーコレクション』（一九九〇年九月、講談社）にも紹介されているところで、大英博物館、ボストン美術館、シカゴ美術館などと並ぶ世界的な絵本コレクションとして、世界の日本絵本の研究者や愛好家の仰慕の的となっている。とくに個人のコレクターの蒐集になるコレクションとしては、空前の規模を成すもので、さいわい散逸することなく完存することは、まことに特筆すべきことであろう。そも

そも本コレクションは、江戸時代の絵本を中心に、近現代の絵本にも広く及んでおり、絵師の流派や時代による区別を超えて、日本絵本の全体を被うようなコレクションの構築を目指したものである。その結果、非常にバランス感覚の行き届いた内容となっていると同時に、中には天下の孤本であったり、諸本中の最善本という評価を得ている稀観本の類も少なくない。また、たとえ伝本は珍しくなくとも、初摺りの善本に至っては枚挙にいとまがないほどである。

従来、日本ではとくに浮世絵系の絵師による絵本が注目されることが多かった。本コレクションも、浮世絵系に見るべきものが多いのは事実であるが、そればかりでなく、琳派、円山四条派、南画など、さまざまな流派の絵本が集められていることも忘れてはなるまい。今、本コレクション中、特筆すべきものについて、これまでの調査の実績に基づき、また上掲の *The Art of the Japanese Book* と『秘蔵浮世絵大観 プルヴェラーコレクション』の二書を参考にしながら、以下ざっと挙げて見たい。もとより、気が付いたかぎりを恣意的に挙げて見たに過ぎないことをお断りしておく。

浮世絵師系のもものでは、菱川師宣『小袖のすがたみ』（天和二年）、鳥居清信『武道色八景』（宝永二年）、大森善清『絵本深山鹿』（享保三年）、奥村政信画『絵本風雅七小町琴碁書画』（寛保～延享頃）は天下の孤本または伝本極稀の例である。色摺りでは、一筆斎文調、勝川春章『絵本舞台扇』（明和七年）と鳥文斎栄之『錦摺女三十六歌仙』（寛政十三年）は諸本中の最善本であり、本コレクション中の白眉といっても過言ではあるまい。鳥居清長『彩色美津の朝』（天明七年）、勝川春潮『絵本千代秋』（寛政二年）、歌川豊広『陸奥紙狂歌合』（寛政五年）、水野蘆朝『絵本多能志美種』（寛政八年）などは、稀本であるうえに保存状態がよい。芝居絵本の『橘香帖』（文政五年）などは他に所在を聞かない珍籍である。春本も西川祐信『絵本美徒和草』（宝永八年か）、月岡雪鼎『女大楽宝開』（宝暦年間）をはじめ、各種複製の底本に使われている喜多川歌麿『葉男婦舞喜』（享和二年）他があり、研究者のみならず、愛好家にとっても垂涎的であろう。

また、浮世絵師以外のものでは、清絵斎『名公扇譜』（寛文十二年）は堂々たる和刻画譜であり、同じく和刻本の『芥子園画伝』初板（寛延元年）は状態がよく、彩色の妙技を味わえる。英一蜂『絵本図編』（宝暦二年）、鳥山石燕『百鬼夜行』（安永五年）など、いずれも状態のよい美本である。堤等琳他『伯楽集』（寛政九年）は他に伝存が一例あるのみ、斎藤秋圃『葵氏艶譜』（享和三年）、池大雅『大雅堂画譜』（文化元年）などは名物本の善本で、谷文晁他『書画帖』（天保元年）も伝存稀である。とはいえ、その特色を煎じ詰めていうなら、やはり浮世絵系の江戸後期の色摺り絵本に見るべきものが多いということになるだろうか。明治以降、昭和に至る絵本も、明治四条派の領袖幸野棟嶺の画譜や琳派の戴斗神坂雪佳のデザインブックから奇才恩地孝四郎のアートブックに至るまで、品揃えは充実しているが、稿者の能力の範囲を超えるので、論評は控えたい。

二、調査データの由来

さて、本コレクションの調査の経緯についても付記しておきたい。調査は、一九九六年より、国文学研究資料館文献資料部の海外資料調査プロジェクトが、科学研究費補助金を得て開始されたものである。最初に当部の担当者であった辻本裕成、鈴木と整理閲覧部のロバート・キャンベルが相談して、キャンベル氏が認めた一通の手紙によって、プルヴェラー博士の許可を得、道は開かれたと記憶している。以来、プルヴェラー博士の私どもの事業に対する温かい理解の元に、調査も終始一貫、順調に進めることができ、国文学研究資料館のスタッフを中心に、多

くの人がその調査に従事した。本コレクションの調査がケルンのご自宅で実現できたのは、なによりもブルヴェラーご夫妻の温厚でふところの深い対応ぶりであったのであり、あらためて感謝の気持ちを表したい。

調査に従事した国文研のスタッフは、岡雅彦、新藤協三、谷川恵一、辻本裕成、山下則子、和田恭幸の各氏の他、キャンベル、鈴木などであった。その後、コレクション全体の持つ資料的また文化的価値に鑑みて、解題目録の編纂を目標に据えた、より研究的性格を高めたプロジェクトとして再編成することになる。調査対象を近代を含めた全絵本に据え直し、書誌記述なども、以前のものを踏まえつつ、若干、変更することとした。併せて、調査研究チームも編成し直し、浅野秀剛(当時、千葉市美術館、現在、大和文華館)、ロバート・キャンベル(当時、国文学研究資料館、現在東京大学)、ティモシー・クラーク(大英博物館)、佐藤悟(実践女子大学)、鈴木の名を以て中枢メンバーとし、近現代の絵本調査のために千葉市美術館の西山純子の協力を仰いだ。さらに、調査の協力者として東京大学大学院生の神林尚子、佐藤温、データの整理について日本女子大学大学院生の田代一葉の助力を得た。経費は、国文学研究資料館の目録プロジェクト(代表、鈴木)の科学研究費補助金等を充当しながら、さらに現地調査とデータ整理を繰り返してきた結果、二〇〇四年に調査を終えることになった。

しかし、その後、出版計画の頓挫、コレクションの米国スミソニアン協会フリーア美術館への移管、さらには国文学研究資料館の組織改編、立川移転などの要因が重なり、目録データの公開に向けた動きも停滞を余儀なくされた。ただし、その間も、鈴木の手元で細々とデータ整理の作業は続けられていたところ、二〇〇九年、内外の識者の助言もあり、コレクションの早期公開を促進するために、フリーア美術館のジム・ウラク、アン・米村両氏と相談して、調査した全書誌データを美術館に提供することを決断した。現在、フリーア美術館は、国際的な活用を期して、フル画像目録とリサーチ・データベースを制作中である。また二〇一〇年、ジョン・カーペンター(当時、ロンドン大学、現メトロポリタン美術館)に誘われて、東京大学の同氏のクラスでブルヴェラー・コレクションについて話をする事になり、改めて同コレクションについて考え直す機会に恵まれたことも、個人的には貴重な経験であった。ともあれ、国内の日本絵本に対する研究の状況を考慮した結果、日本の研究者にとっては、日本語のデータがなお有益であろうという判断に至り、今回、本目録稿を編纂することとしたのである。

目録データの各項目ごとの書誌的記述は、ほぼ画工名、著編者名、出版時期、出版書肆(素人蔵版者を含む、近代は発行所)、数量、大きさ、丁数、色摺り・墨摺りの別、出版情報、序跋、広告、表紙、構成、画工署名などの事項および内容注記からなる。絵本の目録ということで、今回とくに留意したのは、構成、画工署名、彫工名の三点である。まず構成として、序、絵(本文)、跋、奥付(広告・刊記)などの種分けと、その丁数を記したが、方針の確立が遅れたため、構成を記述した項目と、記述していない項目がある。また、気が付いた範囲で、画工署名を記すように努め、同時に、画工署名と並んで記されることが多い、彫工名についても極力、記述するよう努めた。以上、いまだ十分に整備されたデータとはいいがたいが、不備や不統一については、今後とも修訂を加えて行くこととし、とりあえずこれで一区切りとしたい。また、別途、国文学研究資料館の古典籍総合目録データベースへの掲載を急ぐべく、担当者とも詰めの相談を始めたところである。(了)